

Ratnāvalī の阿含的表現

本 庄 良 文

中観哲学の創始者、龍樹（150～250）の真作とみなされている Ratnāvalī は、国王に対する書簡という形式をとって、大乘の教義を説くものである。戒律の実践を述べる部分あり、抽象的な理論を展開する部分ありで、内容は多岐に亘るが、その文面の処々に、阿含に基いたと思われる表現形式や教義が見えかくれしている。

以下の報告は、Ratnāvalī の、阿含に基いたと考えられる箇処を適宜抽出し、簡単なメモを加えたものである。阿毘達磨の研究に阿含の知識が不可欠であるということは常識である。中観哲学についてはどうであろうか。中観哲学は、阿含の伝統をどの程度体現しているのであろうか。そういった疑問の解答への、ひとつの糸口として、このような作業も全く無意味ではあるまい。もとより、多分に主観的なものにすぎないが、識者の御批評を頂ければ幸いである。

底本として Michael Hahn 校訂本を用いた。言及することがある「注釈」とは、チベット訳のみで伝えられる Ratnāvalītikā（大谷目録 No. 5659）である。パーリのテキストは PTS 版を用い、略号は通例に従った。報告は、Ratnāvalī 第一章冒頭のみについて行うこととする。

I. 2a : dharmam ekāntakalyāṇam

注釈 (Ñe 154a8) に示される如く、“dhammaṃ deseti ādi-kalyāṇaṃ majjhe-kalyāṇaṃ pariyosāna-kalyāṇaṃ” (DNI, 62; SN I. 105, etc) といった表現をうけたものである。Mahāvīyūtpatti §§ 1281-1283 をも参照。

I. 8-9

十不善業道については枚挙にいとまなし。

I. 14+19

十不善業道、十善業道を中心とした業とその報いが列挙されている。十地経（近藤本 p. 41f）にも同様のことが説かれているが、全体としてよく合致するのは、MN No. 135 “Cūḷakammavibhaṅgasuttam” ; 中含 No. 170 鸚鵡経 (大I. 703c) である。その内容をパーリによって紹介すると次のようである。

世尊が祇園に居られたとき、スバなる婆羅門学生が世尊に問うた。——同じ人間として生れたもののうちにも、① 命の長短、② 傷病の多寡、③ 美醜、④ 名誉の有無、⑤ 財産の多少、⑥ 家柄の上下、⑦ 頭脳の良し悪しが認められるのは何故かと。私は、「衆生というものは業に縛られている存在である」と略説し、それを具体的に説き明していく。すなわち、① 殺生をすると悪趣に墮ちるが、そうではなくて人界に戻ると短命に終る。殺生をしないと天界に生ずるが、そうではなくて人界に戻ると長命となる。同様に、② 傷病の多寡は暴行、傷害をする、しないに関わり、③ は、怒る、怒らぬに依り、④ は、他人の名誉に嫉妬する、しないに依り、⑤ は、布施する、しないに依り、⑥ は、頑迷、高慢である、ないに依り、⑦ は、智者に質問する、しないに依るのである、と。

以上の内容のうちの、① は 14a に、② は 14b に、③ は 18a に、④ は 17d に、⑤ は 17a に、⑥ は 17c に、⑦ は 18ab にそれぞれ該当し、18で、「以上は、人間界に生れた場合の果報であって、何よりもまず、悪趣が [その果報である]。』と云い、19で、「不善業の果報をいま説いたが、善業の果報はそれと全く逆である」という意味のことを述べるのも、上の阿含の説と全く平行している。

また、注釈が 14a の *hiṃsā* とは生命を奪うことであり、*vihīṃsā* とは、生物を傷つけることである、というのも、阿含によって正当化される。17d は、「嫉妬によって虚弱さがある」となっているが、これは、パーリ（乃至はそれに類似の俗語）の “*appesakkha*” を、“*alpa-yaśas-ka*” (CPD) ではなく、“*alpa-iśa-ākhyā*” (cf. Edgerton, BHSD) と解釈する伝統に従ったためである。

I. 22c : manasā karmaṇā vācā

身語意の三業を列挙するうち、身業をただ “*karman*” とするのが特徴的であるが、同様の例が Sn 365a, “*vacasā manasā ca kammanā ca*” にみえる。

I. 25ab: dharmah sūkṣmo gambhira-darśanaḥ

“dharma”を形容する“gambhira-darśanaḥ”なる語は見慣れない。チベット訳者は、“zab par sṅaṅ ba”（甚深なるものとして顕われる）としている。これは、gambhira-darśana=gambhira-avabhāsa と理解するものであって、次のような阿含の定型表現をふまえたものである。

adhigato me dharmo gambhiro gambhīrāvabhāso durdarśo duravabodho 'tarkyo 'tarkāvacaraḥ sūkṣmo nipuṇaḥ paṇḍita-vijña-vedanīyaḥ.

これは、仏伝の梵天勸請の直前、仏が、自己の悟った法が、極めて理解しがたいということを心に思う場面にあられるものであって、“dharmo”にかかる形容詞は要するにみな「理解が困難な」という意味である。

I. 25c: bālānām aśrutimatām^③

“bālo 'śrutavān pṛthagjanaḥ”なる表現は、阿含の定型句である。俱舍論梵本 140¹⁵; 465²¹ 参照。前者について称友 (300¹⁶ff) は、「生得の慧を欠くのが bāla, 阿含 [を学ぶこと] より生じた慧を欠くのが aśrutavat, 聖諦現觀より生じた慧を欠くのが pṛthagjana である」という意味の釈をほどこしている。

I. 26ab: nāsmi ahaṃ na bhaviṣyāmi, na me 'sti na bhaviṣyati.

俱舍論梵本 290¹⁷ に、「外道」の誤った見解のうちで、断見が最もましな説である、という意味の経句が引かれ、それがこの表現と一致する。すなわち、次のようである。

etad agram .bāhyakānāṃ dṛṣṭigatānāṃ, yad-uta no ca syāṃ, no ca me syāt, na bhaviṣyāmi, na me bhaviṣyati.

ただし、同じ表現が、仏弟子の心がけるべき心構えとして、肯定的に用いられる場合もある。AN. vol. IV, p. 70ff に “no c'assa, no ca me siyā, na bhavissati, na me bhavissati, yad atthi yaṃ bhūtaṃ taṃ pajahāmi” とあり、中含 No. 6 (大I. 427) に、「我者無我，亦無我所，当来無我，亦無我所，已有便断。」とあるのがその例である。^⑤

I. 31-34

阿難が、「鏡に依って顔が写り、依らないと写らないように、“我あり”との観念は、五蘊に依ってある」という教えを聞いて法眼を得、他の比丘たちにも、この教えを繰返し伝えた、ということが述べられている。これに相当する経は、SN 22, 83 “Ānanda” (vol, III, 105f); 雜阿含十, 第261經 (大2, 66ab) である。パーリによれば、阿難に説法をしたのは、Puṇṇa Mantāniputta であって、それは、次のような比喻によるものであった。

seyyathā pi āvuso Ānanda itthi vā puriso vā daharo yuvā maṇḍanakajātiko ādāse vā parisuddhe pariya-dāte, acche vā udakapatte sakaṃ mukhanimittam paccavekkhamāno upādāya passeyya no anupādāya, evam eva kho āvuso Ānanda rūpaṃ upādāya asmīti hoti no anupādāya, vedanaṃ, saññaṃ, saṃkhāre, viññānaṃ upādāya asmīti hoti no anupādāya.

(たとえば、同志アーナンダよ、男女を問わず、かざりたてる性分の若人が、きれいな鏡あるいは、澄んだ水槽に映ったおのが顔のつくりを観察するとき、[その鏡や水に] 依ってこそ見ることができ、依らなければ見ることができない、それと全く同様に、同志アーナンダよ、色に依って“我あり”との観念があり、依らなければならない。受、想、行、識に依って“我あり”との観念がある。)

註① Indica et Tibetica, Nāgārjuna's Ratnāvalī vol. I, The Basic Texts, by Michael Hahn, Bonn, 1982,

② Yaśomitra, 103¹⁴ff; Gnoli ed. The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, vol. I, 128.

③ ‘aśrutimatām’ に写本の裏付けがないのであれば、‘aśrutavatām’の方がむしろ良い。

④ 『南都仏教』第49号所収、「シャマタデーヴァの俱舍論註—随眠品—」の当該箇処参照。

⑤ 以上二経は平行経である。この二経に対応する梵文經典が、Yaśomitra 270²²-272⁴ に引かれる。

(1983. 6. 3)